

『とつとまのとつかえっし』

— 幼児と高齢者の異世代交流の絵本を読む —

上垣内伸子



昨年十二月に、新しい幼稚園教育要領が告示された。現行の教育要領を基本的にふまえつつ、幼児を取り巻く今日的課題が加えられた改訂であったように思う。新たに加わった文言の一つに「高齢者」がある。領域「人間関係」のねらいの中の、「高齢者をはじめ地域の人々など自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ」という部分である。改訂に先立つ平成九年十一月に出された「時代の変

化に対応した今後の幼稚園教育の在り方に関する調査研究協力者会議」の最終報告の中で、教育内容改善の重点事項の一つとして「高齢者等との触れ合い」が挙げられている。曰く、「高齢社会を生きていく幼児にとって、高齢者と実際に交流し、触れ合う体験をもつことは重要である。このため、地域の高齢者を幼稚園に招き、運動会や生活発表会を一緒に楽しんだり、昔の遊びを教えてもらったり、昔話

や高齢者の豊かな体験に基づく話を聞いたりするとともに、高齢者福祉施設を訪問して交流するなど高齢者と触れ合う活動を工夫していくことが大切である」。

もとより、幼児が高齢者をはじめ自分を取り巻く様々な人々と直接触れ合っていくことは重要であるし、幼児と高齢者の異世代交流が両者にもたらす実りは大きい。けれどもそのためには、まず交流の質を問うことが必要となるように思う。

私の勤務校には高齢社会生活研究所という学内の研究機関があり、高齢者に関して、所属学科を越えた共同研究を行っている。私も同僚の先生方と一緒に、乳幼児と高齢者の異世代交流のあり方についての調査研究を続けている。そこから得た結果として、前記の最終報告にも書かれている運動会などの行事への招待や施設訪問といった、いわば非日常的な交流よりも、むしろ、日々の保育や地域での生活

の中での日常的な触れ合いの方が、幼児にも高齢者にも心に残る交流となることがみえてきた。敬老の日が近づくとも手作りのおみやげを持って高齢者施設を訪問し歌を一緒に歌うといった、通り一遍の交流プログラムでは、真の交流は図りにくいように思われる。

一人ひとりの幼児に自分の祖父母や近所の高齢者との関わりの話を聞くと、実に多様で鮮やかなエピソードを伝えてくれる。「この髪、おばあちゃんに切ってもらったの」「僕のおばあちゃん、若い頃、高速道路でトラックと競走してたんだって」「わたし、おじいちゃんの車椅子、道が斜めのところでも上手に押せるようになったの」などなど。

他ならぬこの僕・私と、他の誰でもないあのおじいちゃん・おばあちゃんとの交流、さりげない日々の暮らしの中での互いの息づかいの感じられる関わりこそが、高齢社会に生きる子ども達にとって意味

ある異世代交流なのだろう。

前置きが長くなってしまった。異世代交流の研究の一環として、絵本に描かれた交流の質について調べている。その過程で出会った心に残る絵本を紹介したい。絵本の中の子どもと高齢者の日常の交流の内容は、二つに大別される。(平成九年度十文字短大幼児教育学専攻科境和子の卒業研究参照) いろいろなことを一緒に楽しみ互いが喜びを持って生活している様子が描かれたものと、「老い」を迎え、けがや病気で弱くなってしまった高齢者と子どもとの関わりについてのものである。どちらの場合も多くの子どもと高齢者は対等で友だちのような関係であり、前者は仲間として今を共に生きることが、後者は子どもの成長と高齢者の老いという時の流れの中で、ケアされる・ケアするという役割を交代していることがテーマとなっている。

『とつときのとつかえっこ』(サリー・ウィットマ

ン文、カレン・ガンダーシーマー絵、谷川俊太郎訳、童話館出版、一九九五年/原題『A Special Trade』)は、後者に属する絵本、作者のウィットマンが自分の祖父をモデルとして書いたストーリーである。

バーソロミューはネリーの隣にすむおじさん。ネリーが赤ちゃんの時の毎日の散歩はお決まりの道。オリバーさんちの前の道のでこぼこを通るときにはしっかりとつかまり、可愛い犬の頭をなでて、いじわる犬は追い払う。プリングルさんのスプリンクラーが回っていけば、しぶきの下を駆け抜ける。二人だけの散歩メニュー。ネリーが歩きはじめるようになった時、バーソロミューが手をつかむと「イヤ、イヤ！」とふりほどく。助けて欲しくなかったネリー。だから、バーソロミューはいざというときだけしか手を貸さなかった。いつもいっしょのふたりのことを、近所の人たちは「ハムエッグ」と呼ん

だ。ネリーは学校に上がり、バーソロミューはもつと年をとる。ネリーは手を貸してあげたいときもあつたが、いざというときしか手を貸さない。バーソロミューの気持ちがかかるから。ある日バーソロミューは階段でころび入院。しばらくたつて車いすのつて退院してきた。今度はネリーが車いすをおす番。『やりかたは よくしつていた。そうつとやさしく ゆっくり。』昔のように、でこぼこ道に氣をつけて、可愛い犬の頭をなでて、スプリングラーを一気にくぐり抜けて。

プリンゲルさんが かきねからのりだして
いった。

「バーソロミューが あなたを おしていたのが
まるで きのことみたい」

「それは むかしのはなし」ネリーはいった。

「いまは わたしが おして、

バーソロミューが すわるばん……。

とつかえっこみたいものね」

老いていく者と育つていく者との役割交代、それを作者は「とつかえっこ」"trading" という言葉で表現している。大人が果たしていた役割をやがて子どもが成長して受け継いでいくことを継承ととらえて、「バトンタッチ」という一方向的な言葉で表すことも多いが、この本を読むと、相互性をもつた"trading" という言葉がよりふさわしいような気がしてくる。谷川俊太郎の「とつかえっこ」という訳も秀逸である。

ネリーとバーソロミューは、何を「とつかえっこ」したのだろうか。care giver, care takerという役割だけでなく、相手をいたわる気持ち、優しさ、親切、互いの気持ちを尊重する誠実さ、そして温かいユーモア……。相手を思いやる思いやりの心とは、このような気持ちのとりかえっこではないだろうか。何かを具体的に教えてもらったわけではない。

けれども、寄り添い合って過ごすことで、互いの魂がいつしか響き合い分り合っているのだろう。このことは、子どもと老人との間に限ったことではなく、人と人とが交流することの原点にあることのように思う。

類似したテーマの本としては、『さあ歩こうよおじいちゃん』（トミー・デ・パオラ作・絵、絵本の家刊）などがある。お近くの図書館の児童書のコーナーをのぞいてみられたらいかがだろうか。

（十文字学園女子短期大学）

「障害者を障害者と思わない」こと

松原 洋子

中学一年生の少年が、夏休みに友達同士で旅行をしたと言いだした。東京から青森までの長旅であ

る。それを聞いた母親は心配する様子もなく、子どもたちの出発を見届けると、これ幸いとばかり夫と